

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

The Epitome of James Joyce' s Finnegans Wake
I, 5 (104.1~125.23)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大島, 由紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/2634

[資料]

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』

第1部第5章の概要

(104.1~125.23)

大島由紀夫*

(Accepted November 21, 2022)

The Epitome of James Joyce's *Finnegans Wake* I, 5 (104.1~125.23)

Yukio OSHIMA

Abstract: I translated into Japanese James Joyce's *Finnegans Wake* I.5 (104.1~125.23). In some parts I translated it word for word, but in other parts I just gave the gist of the sentences or the paragraphs. So in naming the title I used the word 'epitome,' not 'translation.' The part I translated in this journal mainly treats ALP's manifesto or letter found on the mound by a hen: how it was found, how it looks, how it should be read, how the problem of love which it treats should be considered, how each letter or punctuation or sigla looks and means, how it is criticized, and so on.

Key words: *Finnegans Wake*, Part I.5, epitome

この慈悲に溢れたる者、永遠の命を持つ者、多様性をもたらす者であるアナーのために、彼女の夕べが光で覆われますように！ 彼女の歌う時の様が歌われますように！彼女の小川が、不規則に流れるのと同じように淵を持たずに【自由闊達に】流れますように！

最も高貴なる者を記念して彼女が書いた、この題名のついていないマニフェストは、時代によってそれぞれに、次のような多くの名前でも知られていた。すなわち我々が耳にするのは、**老いた海獣を救う威厳溢れる高貴なエインガス**【アイルランド神話における愛の女神】、**波間を進むロックアピル**【アイルランド東北東の2つの島】の阿呆、あらゆる礼儀作法の遺物に乾杯、まさにアナは注目的、ボロの銃器を壊してしまえば大砲閣下が生まれる、私の金の宝物と私の銀婚式、恋愛のトリスタンと氷のイズルデ、ソーヤ【ジョナサン・ソーヤはアメリカのジョージア州のダブリンの設立者】が【川の】流れに向かって言う、私はお前に媚薬で洗礼を施した、お前も私と同じことをした、と、一口の食べ物のために出生地を買え、君の昨日の言動のうち明日にとって意味のあるものはどれか、憂色のビール醸造者は頭脳ある給水

従事者を殴る、天井にいる雲雀は床にある割れ目を避ける、アイルランド人についての判じ絵、普通よりも狂気じみた手紙、イギリス女に対する嘲りの唸り声、入植者たるペテロは誰かの計略を盗みとり、下層民を放り出した、大なるものへの謝罪（夫とか宿泊設備付きヨットとかズボンのベルトとかいう一部の名詞は、おそらく大きなものを表すものとして理解されている。というのも、私の与太者で間抜けな夫の船はポルトガルへの旅に出かけてしまったとか、彼は決して時間というものを持っていない【両者ともにトマス・ムアの詩の題名のもじり】とかいう富を表す大仰な表現もあるからだ）、彼のもとを訪れるべきか、というのも、【彼の】箱舟には動物園や、ラクダの毛の櫛やエジプトのピラミッドとともにサハラ砂漠にあるアルトバラ・ハウス【ダブリンにあるジョージア朝風建物】が描かれているクレオパトラの針仕事【「クレオパトラの針」はロンドンとニューヨークに移された古代エジプトの2つのオペリスク】があるからだ、父たる神に捧げた酒一瓶の中にあるコック、陛下がお喜びになりますように、古い淋病に対する新しい治療法、彼らが1羽の雄のガチョウになる気配を見せている

* Professor Emeritus of Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan (東京海洋大学名誉教授)

場所で、どんなにか自分が何羽かの雌のガチョウであれ
ばいいのと思うことか、優しいネティーよ、彼を信用
してはいけない、(105)ヴェニスのギンバイカ【低木】
が1列になったブロックに戯れかかった時【歌「ヴィー
ナスのギンバイカがバッカスのワインと交わる時」のも
じり】、彼が子供たちを友人たちにくれてやったことに
盃を高く上げて乾杯して下さい、オーモンド・キーを歩
いている者はアミアン取引所【売春地域】を訪れる、私
がおばあちゃんになっても彼は喜んで私を抱く、20室の
私室と90台のベッドと1つの居間で私はこの人生を送っ
た、金色の階段のある家【上海の売春宿】で2人は会う
ことなく登っていく、次に選ぶべき道、彼は我がエルサ
レムで、私は彼のポー川【ポー川はイタリアの川。Poは
ドイツ語で「尻」の意味】、西欧における最高位者、つ
づら折りの道が続く丘の下^のザムザムの泉【メッカのカー
バ神殿近くの泉】の流れのそばで、マルボロ通りを走
る電車の中で、自分の母親の正体を見破った男、耳の不
自由な者に我々の話を試せ、底をすべての人々とするア
ニーの対数、うたた寝性癖者はヤンチャな可愛い踊り子
たちにこっそり耳打ちした、突き刺す鷲、あらゆる鳥類
の王である鷲、外的独白が表す肉体的愛、彼に乾杯、私
を乗りこなす私の騎手さん、あなたは私のものになるで
しょう、そして私はあなたが選んだシーツとなる、私が
彼の情婦だったとあなたに信じてもらいたい、彼には説
明できる、ヴィクトリアの微妙な言葉遣いからアルパー
トの無返答までを、「いいよ」の答えは逸品なので私を
初試して、聖バルバラ【武器の守護聖人】が社会のク
ズどもの前で、バレルオルガン【手回しオルガン】に対
して行ったこと、大酒飲み兼社会のクズ、頭がカラカラ
の大將、象のジャンボがアリスに対して行ったことと、
アニゼット【アニスの油が入ったリキュール】が彼に対
して作用したこと、オフィーリアの臀部の跡形、聞け、
ダブリンの中心部の声を、我が親しきデー人、私の方
が年上なの、北部に住むごろつきどもからこっそり私は
抜け出すの、彼は私のことをアーイシャ【ムハンマドの
愛妻】の再来と呼んでいる、もし腹話術師が遺体と結婚
したらこうなる、今週行われる滑稽なミンストレルショ
ーの中に出てくるフィン族にとってのラップ人【スカン
ジナビア半島北部の先住民族】、1月にどうして背中の
瘤はラッシュ【ダブリン州にある町】で締め出されたの
か、このレディーに注意を向けよ、ネーデルランド連邦
共和国【16世紀から18世紀にかけて今のオランダ、ベル
ギー北部あたりに存在した国家】の勃興からバステュー
ユの陥落【フランス革命】まで、口の開き方の2つの方
法について、私は流れるべき場所では水を止めなかつた
し、また魅力溢れる者の29の名前を知っている、トーリ
ー島【ドネゴール州の北西海岸沖の島】のタタール人は
ガラテヤ【小アジア中部にあった古代ケルト人が建てた
国】を自分の乳牛のように扱う、互いに不和の兆しを見

せているアビー劇場やゲイト劇場からクロウ・ストリー
ト劇場まで、彼女たちの優雅さには音を立てながらのキ
スを、彼ら田舎者には我が手の甲【拒絶、軽蔑を表す】
を、若い父親が酔いつぶれている時でさえ、星占いか
らよき運勢を引いてくるやり方、ワーテルローでの微光
の中で、さらに彼は私の死の跡を追った、3人は前に進
み、2人は元の場所に戻る、私の肌は3つの感覚を求
め、私の丸まった唇は聖コロンバ【6世紀のアイルラン
ド出身の修道僧。アイルランドの守護聖人の1人】のキ
スを求める、事務員たちの貯金を土台としたゲイジ通り
【香港の売春街の通り】、彼ら若者たちはトリオで争い
事を目撃者となったが、彼女たちはデュエットで愛しの
娘となった、我が閣下のベッドの中で1人の娼婦によっ
てあれを経験した、シッ、すべては終わっている、ユニ
ークなアメリカ人所有の12エーカーの台地状の私有地付
近におけるカウボーイの馬の乗りこなし、彼は私に1ス
ー【フランスの以前の銅貨】くれた、だから私は彼にお
茶を出す、(106)荒れた峡谷全体の中の幅の広いすべての
白馬について、オドノヒュー【トマス・ムアの『メロデ
ィー集』の「オドノヒューの恋人」の中で、オドノヒュー
の白馬についての言及がある】、白いオドノヒュー、

私の叫び声に対して彼が叫び声をあげる、私は彼の臀部
に刺しし、あなたはママがいないと碌でもない人間、
あの大男を演説台に登らせないために、そして店から万
引きしてきたペットの写真を撮るために、鱧たるノルウ
ェイ人がポドル川【リフィー川の支流】を見つける、タ
ンネンベルクの兵士のような熱気で彼はここで私に迫っ
た、この草刈り人【死神】が【人の魂を】刈り取ってい
ることを1人の愚か者が嘆いていた、オロックリンよ
【この名はスカンジナビア、特にノルウェイの人を含
意】、私はあなたに雪の朝の哀悼の言葉のみぞおちから
送る、トミー・ムーアのアングロ・インディアン的歌
詞、偉大なるポリネシアのエンタテイナーは、ヴァレン
タインの贈り物としてもらった、自然と結びついたひざ
丈のズボンを見せびらかしている、ミックとニックと猿
どもの物まね、書籍出版業組合のホールにある最新の写
真入り雑誌や定期刊行物のように入ってきた、ジークフ
リーの愚かさ、あるいは紳士としての禁止事項、嫉
妬心についてのペシズムに関して第1の書【創世記】
を見よ、執行猶予、子供向けの英雄が出てくる可愛く分
厚い物語本、我々の浅い眠りのよう、自分がセックスし
たということは知っていたからこそそれで片付いたの
だ、乱暴狼藉者のスミス司令官【ジョン・スミスは16、
17世紀のイギリスの軍人。アメリカの植民地の建設者、
指導者】と残酷なる美女ボカホントス【ジョン・スミス
が捕虜となった時彼を救ったアメリカインディアン女
性】、優柔不断の弱々しい巨人のウィリアム【ウィリア
ム3世】の幼い娘メアリーの出現を待て、フィンガルー

族の最後の人物、彼を株式市場にそそのかしたのは私であり、彼の顧客に美しい顔を貸してやったのも私だった、中国使節団【中国人売春婦？】にばば万歳三唱、私の活気を蘇らせたのはペテロよ、ハンブティダンブティは大墜落した、悪党ポン引き売春斡旋ヒモ、2匹のシラミによる厄災と果実の落下、狐一家の内側、スプレッドイーグル【18世紀のコルセットの店】【で売っているコルセット】がそれほどきつくないのなら、行政長官の家のあの長椅子の上では私はコルセットを緩めるだろうに、アリューシャ・ポポヴィッチ【キエフの英雄詩の主人公】、および私を捉えた鷹のような目、睾丸を見られ、顔を薄く赤らめる、あなたには愛人兼母親からの言葉を信じてもらいたい、フィンの欠点は悪漢でないこと、デルヴィン川を出て生命の川リフィー川に再び入れ、洞穴人【HCE】の目から飛び出た閃光が私の髪を燃え立たせた、彼の家は醸造酒が作った家、後ろから前まで神の視界、アブラハムはサラに対して、ブラーフマン【ヒンドゥー教の創造神】が彼に普通の性を教えるまで、冷然と性を営まないままであった、イブのリンゴをかじると腹の調子がよくなるだろう、ギネス大賛成、リビドー的ざわめきとお世辞の文句、7人の妻が1週間に1回目を覚ます、移り気なアンと血の気の多い野蛮人、ハンフリーが厚切り肉片を食べている間アンはビールを舐める、2人の不美人と3匹の犬、尻とおべっかとバスト、莊園領主の長からグレイス・オマリー【16世紀のアイルランドの女海賊】のような女たちへ、および貴婦人たちから彼女たちの同等の男へ、緑の国の仲間への表明書、その気になったら傑出したバックと卓越したセンターハーフに、樹木に命があるように、石が白いように、(107)私は夜になって体を洗う、名誉あるエアウィッカー氏と金と蛇(金の塊だ!)についての最初で最後の唯一の話、この話をしたのはこの親しい男と彼をめぐる陰謀者たちについての赤裸々な真実をただ1人物語れる市井の女である、そしてこの女によると、この陰謀者たちは皆ルカンやチャベリゾッドあたりで、エアウィッカーの個人情報や、あからさまに下着を見せ、嘘の言葉で英国兵を糾弾していた2人のだらしなないあばずれについての情報を広めて、彼を貶めようとしていたというのだ。

この変幻自在の形態を持った図形それ自体が多面体の書なのだ。ある時代では、ナイーブな書き手であれば、これを完全に罪を背負った、おそらく二枚舌を使うであろう、多分獅子鼻の、奇妙にも深遠なる窪みを彼の(あるいは彼女の)後頭部に見せている常習犯が残した足跡の記録として書きとめたであろう。好奇心旺盛な昆虫学者にとっては、この書は若虫【不完全変態昆虫の幼虫】のまさに性モザイクの世界を示していた。そこでは、砂糖を好む時もあれば塩を好む時もある、腹には感覚の群集を持ちながら、同時に絶対的真実に対する眼も持って

いる、ドラムのように銃を持ち、尾鉾のような相手を撫でるものを有し、相手の夜の臭気に戸惑いながらも喜びを感じる、キメラ【ギリシャ神話中の、頭と胴と尾が別個の動物のものである怪物】の永遠のハンターであるオリオン【ギリシャ神話中の巨人の狩人】が、花から花へと移る蝶を追い求めている。ともかくもこの書は最も純粋な科学書のように思われるが、そこでは薄暗い伝承の形をとった文学が豊かに実っているのだ。すべては夜の暗闇の中にあり、我々や彼には計り知れないものであるもので、いついかなる時でも、今日の目障りな者に説明しようとするなら、我々は異端者であっても、フクロウの出る真夜中まで、1001冊のぼろぼろになった巻物を読むことで、手探りの探求をし続けなければならない。単に驚嘆すべき書というだけのものではないのだが、ともかくも驚嘆すべき書だ。この明細書をより綿密に観察すれば、個性の多面性が複数の記録あるいは単数の記録に傷となって現れていることを窺い知ることができるだろう。またこうした単数の罪、あるいは複数の罪が実際に犯されていることを、そうした罪へのそれなりの対処法が何とかなされる前に、いかなる注意散漫な人間でも予知することができるであろう。だが実際のところは、我々の社会の諸事が、各世代、もっと先の世代、さらにまたもっと先の世代へと長く繋がっている行路(ごく単純なものだ)を、必ずや生じる一連の衝撃的な失望の念を経験しつつ、魂を揺さぶる者と家屋侵入者との間の、およびアルコール常習者と自由思想家との間の、神意に基づく敵対性による困難を伴いながら進んでいく中で、目を閉じた観察者のもとでは、1人のちゃんとした人物における明るい要素と暗い要素とが混在するキアロスクーロ的特徴の矛盾性は、一様に消えてしまったのだ。

教えてくれ、光の授与者よ、ともかくもいったい誰がこの悪書を書いたのか。(108)直立したり、腰をおろしたり、馬の背に乗ったり、隣接地との境界壁に寄り掛かったり、零下の気温の中にいたりしながら、羽ペンか尖筆を使い、混乱したあるいは明晰な心を持って、歯を噛みながらあるいはそうすることなく、言うことを書きつけておくべき古い師や雇っておくべき代書人の訪問に邪魔されつつ、2回の夕立の間に、3輪車の振動に揺らされ、雨に打たれたり風に吹かれたりして、生粋のこの土地の者が、あるいは学識という戦利品を持った、あまりに傷ついた、辛辣なウィットの持ち主が書いたのだろうか。

ソウ、忍耐、忍耐こそが重要であることを覚えておいてもらいたい。我々はとりわけ忍耐に欠けた状態にいたり、またそのようになることを是が非でも避けなければならない。子鯉【孔子の息子】にとって絶対的真理であった中庸や礼といった孔子の教義を修得する契機を、たいして持たなかったであろう商売人たちが悩みながら

活用した良きプランは、スコットランドの蜘蛛もその間柄となったブルース兄弟【14世紀前半にアイルランドに侵略したスコットランド人。そのうちの1人ロバートは蜘蛛が壁を登るのを見て、忍耐することを学んだ】、およびエルバーフェルド【ドイツの1地方】の算数の出来る馬【賢馬ハンス】、この両者が共同名義で出した忍耐という減債基金【債券を償還するための基金】を考えつくことくらいなのである。居酒屋店主や聖職者や園芸家や卑しい売春宿の常連らが、特に中でも牧師が、何年も何年も暗い塹壕の中で調査研究した後で、我らの祖先たちは彼らの名字よりも3音節少ない語で（ソウダ、ソウダ、少ないのだ！）適切に話していたとか、以前のフィン・エアウィッカーの耳は、名人の称号特許を持てるほどに巧妙に地元の通語を使う（聞け！ 呼び出しだ！ エアウィッカー！）放送記者のトレードマークであった、とかいうことを、すべて居酒屋言語を用いて我々に再確認させるという、愚劣な各人共通の目的のために立ち上がったのであれば、綿織物を着ていようが、絹織物を着ていようが、サマイト【金糸、銀糸を織り込んだ中世の重厚な絹織物】で飾り立てていようが、石炭を使っていようが、没食子インクで書いていようが、煉瓦クズにまみれていようが、我々が絶えず立ち戻らなければならないこの電波の振動で伝達される手紙に関して、この鳥籠のような都市のアラジンの洞穴【莫大な財宝のあるところ】の中にいる我々に対して輪を描いてくれるあの光り輝く太陽の下、それが何を意味するのかを我々にふと漏らしてくれる聡明なる人物は、まさに今、シャムや地獄やトペテ【ユダヤ人が昔子供を神に生贄として捧げたエルサレムの霊地。のちにゴミ焼却場となる】のどこにいるのであろうか。

否定論者のことは我々も知っている。政治的な考え方や金銭的要求が全くないことから、この文面はその時代の、その地域の男あるいは女がペンを使って創り出したものではあり得ないといった、完全に否定的な結論を彼らは出してしまおうのだが、これは拙速な、思いもよらない結論のうちの1つに過ぎず、逆さになった2つのカンマ（時々引用符と呼ばれている）がどの文面にも存在していないことから、構成の上で他人の話し言葉を盗用することなどこの筆者には決してできないと推論することに等しいのである。

(109) 幸運にもこの問題には別の側面がある。ありふれたタイプの人物—退屈な夕方、心を静かにすれば、ある程度思い浮かべることができるかもしれない—、40歳くらいの、肝っ玉の小さな、ちょっとばかりうぬぼれ屋の人物、君主の末裔であるが、実際には君主とは別の者の息子に過ぎない、偉大なフィン・ヤング【フィネガン】の複雑な言動を解説し短縮化することで論理的に推測できる、そうしたそこら辺にいる平凡な人物は、消印の押された、住所の書いてある、かなり日常的な様相をもつ封

筒をじっくりと時間をかけて見たことがあるのだろうか。確かに封筒は外側の殻である。その表面は不完全の成就という特徴を持っており、それが封筒の宿命となっている。それは文官のあるいは軍人の制服を示しているに過ぎない。それをたくし上げると、衣服の垂れ下りの下に、いかに情熱にあふれた青白いむき出しの肌や、疫病で紫色になった皮膚が露骨に見えようとも、そうであるに過ぎないのである。しかしながらいかなる記録であれ、その記録を証拠立てる事実そのものを全く無視して、その文学的意味にのみ、場合によってはただの心理的内容のみに関心を集中させてしまうことは、健全なる思索（最も本質的な判別力をも付け加えておこう）にとって有害である。それは例えば、ある男がまさかの時の友達である別の男から、偶然その別の男の知り合いである婦人を紹介してもらい、すぐさま走り去り、丸々とした不器量な彼女の裸体を心に浮かべ、先祖から受け継いだ、2階で行う精妙なる儀式【オナニー】を行うようなものなのだ。この場合、口の悪い批評家ならば、【彼女の服を】明らかに進化した衣料品とか、不調和な代物とか、あるいは厳密に言って必要のないものとか、あるいは、幾分人を苛立たせるようなところがあちこちにある粗悪品ではあるが、しかしそれにもかかわらず、当然のことながら地方色と個人的な芳香に満ち、さらにもっとずっと多くのものがそこにあるような雰囲気をも漂わせ、伸長力があり、そしてまた、もし必要性や希望があった場合、もっと見栄えをよくするには、専門職人の左手によって、今まさにそうなっている、驚くほど類似している左右対称の部分の切りとってしまうことで完成する服、とか言うであろう、そうした歴として存在する服を、お分りの通り、一時的にでも彼女が着ていたという礼儀作法に関わる事実に対し、ただでさえ視野の狭い目を閉じることにして、そうした儀式を行うようなものなのだ。こうした女性の衣服にまつわる事実が常に存在するという、またこうした事実以上に奇妙な、女性にまつわる架空の話もまた、事実のほんの少し後方で同時に存在するという、誰が心の中で疑うであろうか。あるいは事実と架空の話がお互い同士分離されているらしいということを誰が疑うであろうか。あるいはその場合、これら両方が同時に熟考されるであろうということを誰が疑うであろうか。あるいはそれぞれがもう一方と別個に取り上げられ、代わる代わる別個に熟考されるであろうということを誰が疑うであろうか。

(110) ここではいくつかの人工の事実をして自らのためになるように身を守らせよ。この川は塩が必要だと感じていた。それはまさに海水が入ってきたところであった。この国の人々は夕食に熊の足を求めた。それが跳ね出るかのように豊富に彼らは確実にそれを手に入れた。天の下に生きている我々、クローバーに満ちた王国に住んでいる我々、中程度の罪を犯している我々は、空が地

である。ソウ、まさしくこれが私にとって小柄な、私のように丈の長い雌鶏の叡智によって、肉屋から汚されずにすんでいる手紙に起こったことに違いないのだ（君にとって芝生があります！ 雑草を一掃してください！）。(112)我々が後方に下がれば下がるほど、この雌鶏が見たのと同じくらいよく見えるようにするには、レンズの力を借りる必要性が大きくなるが、しかし手紙の置き場所は、オレンジの香りがする泥の山の中心部であり、暖かなその熱の中に留まることで、最初に手をつけるべきネガが一部抹消され、一部の形状がこの上なく大きく膨れ上がっているのが、鼻先にははっきりと見えたの

ティップ
だ。ゴミ捨て場。

諸君はこの手紙を読むと藪の中で迷ったような気分になるだろう。そうではないか？ 諸君はこう言う、これは全くの言葉の樹海だ、と。諸君はたいていこう怒鳴る、この樹海で何を奴が意味しているのか、俺にほんの少しでも分かるのなら、俺のことをブナの切り株だと思ってくれ。サア、どうなんだ、女々しいの！、と。4人の福音伝道者たちは【この手紙について彼らなりの】解釈を持っているかもしれないが、しかしいかなるジプシーの放浪者も、昔からの知識の袋から多くの火を生み出すものであろう。

教え導きたまえ、親切な鶏よ！ 彼らは常に行った。時期を問うことを。飛ぶことにせよ、毛が生え変わることにせよ、ひなを孵すことにせよ、巣の中で取り決めることにせよ、昨日鳥が行ったことを人間は来年行うことがあるかもしれないのだ。というのも、諸君、この鳥の社会科学的な判断力はきわめて健全だからだ。彼女の自然になされる鳥としての変容は、まさに正常だからだ。彼女は知っている。まさに感じている。ある意味、自分が卵を産み、卵を愛するために（彼女を信じて種を増やさせなさい。そして騒音と危険の中、毛玉【となったひよこたち】を安全に追いやらせなさい）生まれてきたということ。結局、でもたいていの場合だが、産むことに関しては、勝負事であり、いい加減なものではないし、彼女が行うあらゆることにおいて彼女は淑女的であり、毎度彼女はあの紳士の役割を果たしている。未来を占ってみよう！ そうだ、この世のすべてが終わりを迎えないうちに、黄金の時代が復讐を伴いながら戻ってくるに違いない。男は手なずけられうるものとなるであろう。老いたる者も若返るであろう。滑稽な形の白い重荷【卵？】を背負った女は、一飛びで崇高なる孵化に到達するであろう。たてがみがあってもおかしくはない雌ライオンである人物は、角を取られ手下となった牡山羊を従え、羊毛の上【寢床】でおおっぴらに夫と一緒に横たわるであろう。そうだ、今は確かに彼らの言動はまともに取り合ってもらえていない。2人にとってショックなことに、ビディー・ドーランが文献を見つけて

しまった、肌を刺すような1月の不気味な平日（しかし荒地の中のアオアシスにおける、何と輝いた日であったことか！）以来、この手紙【に書かれている彼ら】は決して昔の彼らとは言えないとこぼしてきた、陰鬱を人の心に注ぎ込む彼らの言動は。

そして。彼女は、この小人の女王は、学位を持ったマーセラ【19世紀後半の小柄の女優エリザベス・エレン・パドックの芸名は、「小人の女王マーセラ」であった】に過ぎないのかもしれない。しかし。これはトガ・ギリリス（トリニティーカレッジ出）というサインのある匿名の手紙について、世間の人たちが耳にしたり、彼女の口に上ったりしていることではない。そうであったら、我々の鼻面に彼女の拳が一発飛んでくる。走り書きのみずみずしい水性の筆跡で**ボン・マルシェの聖母マリア**【ボン・マルシェは、フランスのデパート名。また「安売り」の意味もある】と書かれた紙に我々の目は向かう。そして彼女はアイルランド人の精神を持っている！ 感謝の言葉や朝の挨拶の言葉を使って彼女が話す時、何と光り輝いていることか。ちょっとしたことで分かるように、彼女はでたらめの噂話をしたり、真っ直ぐに立って粗野にも強盗のような呼びかけ方をしたり、労働者階級の女のファンタジーを見せたりする。(113)しかしながら、ラテン語とギリシャ語が入り混じった非常に品のないかばん語の語彙を用いて人の目を眩ませるようなつもりはなかったということ、彼女の手紙を読んだ人のうち何名くらい知っているだろうか。彼女の場合決してそのようなことはなかった！ **ダリウス**【6世紀のペルシャの王】や**マリウス**【紀元前2世紀のローマの将軍・政治家】、毛むくじゃらの海の住人メロヴィング朝の王たちのような、アルメニア語の語源学者にしてみれば、素晴らしい偉大なる古代アルメニア人のような人物なのだ。（畜生！）。彼女は1つの何ということはない事実を明白な思考基盤と感じている。つまり、たとえそれが少なくとも初めてのことであっても、後方に2人がそうするのを欲している者たちがいる中、その2人が前面部【女陰】からしているのを、誰とも一緒ではなく、たった1人で、他の者がいるところで覗く権利は男にはないと感じているのだ。あらゆる草地で事態は彼女たちの周りにいる彼を巡って屈曲しながら6日間自分勝手に進むおしゃべりな倒錯した女たちは見ても構わないわよと大股開きで足を上げる。淑女方、令嬢方、紳士方！ どうか！ 彼女が望むこと（彼女が書くこと）は、ただ彼についての神のみぞ知る真実を語ることだけなのだ。少しずつ。物事を手加減して言うことは出来ない。この老いたる病持ちの彼は、人生を真正面から見なければならなかったのです（と、彼女は書いている）。彼の中には3人の人物がいました（と、彼女は書いている）。ダンスを踊ることには（と、彼女は書いている）只々目がなかったのです。またアップルシャーロット【デザート

用菓子】も。そしてちっちゃなリンゴのような乳房を持った小鳥ちゃんも。特に（と、彼女は書いている）、彼女たちが罪を犯す時。カワイコちゃんはカメレオンのように色々変わるパンティーをはいていました。敬具。ダブリン、アンと付け加える。しかしそれは昔の話に過ぎない。イゾルデという人物とトリスタンという人物がいた時代、テント用の釘で山々が繋ぎ止められていた時代【古代アラブ人は、釘がテントを繋ぎ止めるように、山々が地球を繋ぎ止めていると信じた】、彼の仲間がバラバラになってワーテルローを逃げ回っていた時代、ごろつきが出来たことを、無法者がやろうとしなかった時代、どのジェノヴァ人もどのヴェネチア人も戦っていた時代、ケートが蠟人形を管理する理由があった時代、そういった時代の話なのだ。

さて、天候、健康、危険、社会秩序、そしてその他の状況が許すならば、完全に都合のいい状態であるのであれば、諸君がお望みとあれば、諸君の後で構わないので、どうかどうか、お許し願えれば【こう言わせてもらうが】、私はこんなにも澁刺としているのだ。どうだろう、諸君？ このごまかし合いをやめて、お互い面と向かってざっくばらんに話すことにしよう。というのも、たとえ我々が全くの怠け者であろうとニヒリストであろうと、耳は他の人間が言っていることを信じたくある時があるだろうが、一方目の方は、色が茶色であろうと、眼鏡をかけていなくとも、相手を呪わしいものと思っただ。諸君は耳を持っているが、見ることはしないのか。諸君は目を持っているが、手によって触れたのか。

1つ助言をさせてい^テだ^イこう！^ッ もっと対象に近寄り、それを横目で一瞥して（というのも、結局すべてが見えないと、目は不幸な状態に陥ってしまうからだ）、まだ見ていないものすべてを見ることにしよう。

私は労働者、墓石の石工だ。埋葬されたあらゆる人を喜ばせたいと思っており、毎年1回クリスマスが来ると、嬉しくて楽しい気分になる。諸君はブルジョアで、誰をも喜ばせたいとは思わず、口先うまく警察をくすぐり、物事を独り占めし、(114)また再び家に帰る頃になると非常に残念がる。我々が同じ見方をすることはありえない。同じ匂いの嗅ぎ方をするということはありえない。【しかし我々はともに】多少なりとも【文書中の】線の半分以上は、ドイツやブカレストのような南北の方角に向かい、他の部分は、掘り出し物を求めてマレーシアやブルガリアから東西の方角に進んでいるということに気づかざるをえないのだ。とは言っても、それにもかかわらず、【東西南北の中心である】アルバニアに身を落ち着けて、他の書と比べてみると、これは基本方位を持っている。文書中の語は、これらの制御された枠に沿

って、走り、行進し、立ち止まり、歩き、危なっかしいところでつまずき、比較的安全なところでまた立ち直りながらその痕跡を残して行くのだが、この枠はまず第1にきれいなチェス盤上で、油煙【黒色印刷インキの原料】やリンボクのステッキ【ペンのこと？】を用いて書かれたように思われる。こうした縦横の交わりはもちろんキリスト教の精神に反しているが、筆跡を残すことを援助するものとしてのこの地元産のリンボクの棒の使用は、野蛮から未開への明確な進展を見せている。一部の者は、この手紙の意図は測地的、つまり俯瞰的に査定することだったかもしれない、あるいは利発な者から見れば、家計に関わるものだったかもしれない、と固く信じている。しかしこちらの端からあちらの端へと書き、そして次に【次の行では】向きを変え、くるっと回ってあちらの端からこちらの端へと逆方向に書き、手紙の文字列を上がり気味に、手紙の口調を下がり気味に書き、私の家に来て、とか、お返しに彼らからまた可愛がられたとか、彼が輝くまで奮起させましょう、とか、最後に、皆さん、おやすみ、とか【書いてある】。荒地【としてのこの手紙】の中のどこに叡智はあるのだろうか。

もう1つ別の問題点が、元々の吸い取り砂、インクの滲み止め用の粉、吸取り紙、使用後のボロボロにもろくなった紙に関わる問題点に加わった（今日の我々の社交クラブの常連や常用者は誰であれ、次の場面を自分の目で見る事が出来る。冷気の漂っている小部屋の中で、1脚の腰掛けにシェリーが飛び散り、アルバニア産の卵を使った夕食用の料理、大量のブランディー、ポルトガル産のパンが少し、これらがテーブルの上に用意されている場面だ。こうした場面を見ると、我々が皆子供だった時、甥だった時、姪だった時に、母親が我々に話してくれた、存在価値のない、騙されやすい者のことが思い出される）。つまり、過去を逍遙している間に、現実的な問題が付け加わったのだ。手紙の末端にお茶時についた染みが（旅役者方諸君、最後の決め台詞を言っはならない。さもないと我々のショーは台無しになる【リハーサルの時に役者が最後の決め台詞を言うと不幸な事態になるという考え方があった】）、その手紙自体に対する、ほんのりとした雰囲気を持つ、小さくて茶色い研究材料となっているのだ。そして拇印であれ、トレードマークであれ、単に無邪気な者のつまらない痕跡であれ、そうしたものでその記述者という複合体（というのも、書く手は1つであっても、行動的精神、焚きつけられた精神は1つ以上のものだったからだ）の正体が明確化されることの重要性は、ポイン川の戦いの前でも後でも、習慣的に手紙には常時署名の文字を入れないことを頭の中に留めておけば、最重要視されることになるろう。(115)

ある情報をお伝えしよう。どの子音であれ、子音を使っ

て単語を書くとする、過多に子音を加えるよりも、過少に使った方が無知の度合いが確かに低くなる。それで終わりだろうか。この場合飛び道具を使って表現し、そうすることで文面をアラベスク風に装飾せよ。火傷するくらいに熱い中国茶、蠟燭からのなめらかな蠟の滴り、猫の鉤爪のある足、諸君が嘔んだりする丁子やタバコ、言葉でこうしたものを表せば、諸君のひばりは澄み切った空を飛ぶのだ。それゆえ、諸君、あらゆる単語、文字、ペンの力の入れ具合、余白など、それ自体が完璧な署名なのに、いかなる場合であれ何故署名などするのだろうか。真の友人とは、例えば足に履いているものよりも、個人的な特徴とか、服を着込んでいる時のあるいは裸でいる時の習慣とか、行動とか、慈善行為への要請に対する反応とかによって、ずっと簡単に、おまけによく分かるものである。老人愛主義者の中でもティベリウス【第2代ローマ皇帝】や他の近親相姦的好色家について言えば、1つの単語に、彼らの穏やかな下半身の情熱に関わる警告が仄めかされている。軟弾頭の【物事を実際より大きく捉える】読者の中には、おそらく次の話を愛情表現の通常の事例と誤ってとらえる人もいるだろう。こざっぱりとしたピンクの上衣を着ている**駆け出しの娼婦**が自転車に乗っていて、助任司祭の部屋の入り口の前でわざとデングリ返ると、1. 2. 3、ソレッ！ という男【助任司祭】が、香水の臭いを撒き散らしている男に負けないくらい優しく彼女を抱き起こし、この乙女はたいそうな怪我をしているのだと感じ、穏やかにこう問いかける、なぜ、どこで君はこんなにも優美な怪我を負ってしまったの、とか、ネエ、君、どこから追い出されてきたの、誰が君以上にひどいことをされることあるだろうか、とか言う。しかし我々には、身の毛のよだつほどに気味の悪い精神分析家という奴らが昔からいるのだ。彼らは簡単に不安を抱く若い頃から、女を手に入れるための薄暗い部屋の中で我々があまり微笑まないようなことを分析してきた。そして我々は予言するようになると、何という圧力を彼らに加え、彼らを縮こまらせてきたことか。そうした彼らは、我らのはなたれ小僧に、以下のようなことを言うことができるだろう（我々は**密かに**金を出して買った静けさを、売りたいと思ったのだろうか）。このような多様な文脈の中で**父親**とは、我々に有無を言わさない、説明不可能な身内（度々頑迷さにまで行き着くことがある）では必ずしもなく、女性の外陰部を見た時のミカエルの表情を表すような、無邪気な、頭の混乱を意味する副詞が仄めかし得るものであり、とどのつまり、性的倒錯的家系を背にしつつ、先入観から成る、過去に存在した心的外傷が元となった夢のドラマと、基本的に女家系よりも男家系を優先する交接を求める男根への衝動とを持った、松果体の内分泌によって興奮している女の神経衰弱患者が、好みのタイプの顔を持つ異性のことを好意的に語る時に、淫らな言葉を緩叙

法により口にしながら思慕する対象なのだ、と。そして、その通りなのだ。我々はそうだと言うことが出来るだろう。ソウ、何を言う必要があるか。これは紙媒体が十分に伝え得る話の中で最高に人間的な小話だ。(116) 実際それは、甘い食べ物を求めながらソロモン雅歌【旧約聖書中の1書。男女の恋愛を賛美】を歌う【ほどにロマンティックな面がある】一方で、どことなく道徳的にいかがわしく、ぶっきらぼうで、無遠慮で、その様子は、猫のエスラのように、この猫の母親のように、その母親の生んだ猫の伴侶のように、その母親の生んだ猫の伴侶の伴侶のように、その母親の生んだ猫の伴侶の伴侶の母親のように、といったような人物像なのだ。ということでは我々は元の人間たちの話に戻ることにしよう。というのも、ボルシェヴィキの内実を暴いた書である「ショットンバウム」の『私は将軍だった』の何ページかを読んでみると、次のことも分かるからだ。すなわち、ケーキが政党の資金源を意味し、「ありがとうございます」が、国家への感謝を表している一方で、白色テロ【ロシア革命後の、反共産主義者がおこなったテロ活動】が行われている今の共産主義の時代において、マイケル神父は昔の政治体制であり、マーガレットは社会主義革命となっているということである【同じように、この手紙も政治的な読み方もできる】。要するに、たまたまではあるが、我々はスパルタクス団【1915年から3年間存在したドイツのマルクス主義者の政治団体】の内部細胞について聞いたことがあるのだ。我々はまだ追い詰められてはいない、過去の人間の圧力に！ 我々は自然と涙を出しながら、あのカエル姿のユダヤ人たち【The Foggy Dew というイースター蜂起に関わる歌をもじっている】のことを思い出すことができる。このダブリンという美しい都市にいと、1年も経たないうちに、この団体はもっとずっと穏やかなものであった、と今我々は思う。我々は態度を改め、楽しいいい気分を味わうようにしていたのだ。この時我々は、「スウォーズ【ダブリンから北10kmの郊外の町】の町から海へ」の歌を「ホース岬の銃」と合わせて歌い、そして「大胆なオデュワイアが答えた」の歌を歌っていたのだ。しかし、**言葉には限界がある**。売春婦とは誰であれドアの前に立ち、ウィンクし、フェニックス公園のマガジン要塞近くの円蓋屋根の館にこもる人物としよう（罪だ罪だ、罪だ罪だ）。バーテンの助手とは誰であれ、強いアルコールを持ってくる人物としよう（ジンだジンだ、ジンだジンだ）。しかしまた、忘れてならないことは、一部のこの国の人間が【それらの言葉によって】最初に受け取るものと、それより多くの外国人が最終的に受け取るものの中には、多くのずれがあるということであり、また、ウエディングケーキの素晴らしい存在は、一生涯（！）牛乳配達人のミッキーを恋人と食べた甘いタルトという言葉の中に置き、彼の双子の片割れであるニッキーに対してはパン

チを食わせ、地獄の憎しみの感情を抱かせる可能性が十二分にあるということであり、またマギーのお茶は、それが生まれながらの紳士からの元気づけの品物と聞かされたならば、皇族の品物になってしまう、ということである。というのも、敷布の間で【ベッドでは通例シーツは体の上下に2枚用いられる】口にされる訳の分からない言葉が、母音であれ、半母音であれ、舌音であれ、唇音であれ、歯音であれ、喉頭音であれ、尻出音であれ、どんなに基本的に英語であっても、教区委員や街の形而上学者や法廷弁護士の口から万が一唱えられたなら、彼らの業務はどこに行ってしまうのだろうか。どんなに言語が叙事詩的であっても、学者の知識が詰まったピタゴラス派の長ったらしい言葉が、またサミュエル記における嘆きの言葉や、ハバクク書の言葉や、オパノフ書言葉や、ウガミグ書言葉や、記録や資料中の1度しか使われない稀な言葉が、プブプフッ、国中の踏み越し段越しやら、スレート屋根の住居の背後やら、行き止まりの小道やら、あらゆる果実が駄目になった時の粗末な荷馬車に残された粗麻布の下やらで、眩かれたり、怒鳴られたりしたならば、人類自体はどこに行ってしまうのであろうか。

そのような形で愛は存在してきたのであり、今も存在するのであり、これからも存在するのであろう。廃れるまで、裂けるまで、長い年月が経つまで。(117)泥棒が夜我々のところから盗んでいくように、こっそりと、我々はこのそよ風を盗み得る。他のものより薄い、最も着心地のいいこのショールを。そして自分のものにするのだ。耳をすませ、オイ、耳をすませ。高慢なる金髪のイゾルデがいる！ 悪しき聴聞者であり勇敢なる裏切り者【トリストアン】がいる！ 雷光の様相、鳥の叫び声、墓からの畏怖の声、これらが常に時の中を流れている。火、大気、大地、水【が常にあり】、今も人間の所産の上に神である太陽が輝いている。【誕生の時の】喜びの拍手、適正なる結婚、好ましからざる通夜、地獄での幸福について語れ。こうしたことが夫と妻の繰り返される【愛の】喪失と獲得の運命となっている。男が顎に再び緑の髭を生やすと、女がそれをむしり取るが、しかし髭は再び生えてくる、といったようなものだ。そこで、このことについて諸君はどう対処するのであろうか。アア、どうなるのだ！

6月になると彼女は集め蓄えた！ へー、ホー！ クリスマスになると彼は語ることができた！ このむむ昔からの話を！ キキキネ【エドガー・キネは19世紀のフランスの歴史学者】からミミミシュレへ【ジュール・ミシュレは19世紀のフランスの歴史学者】、ジャンバステイッタ【ジャンバステイッタ・ヴィーコは17世紀のイタリアの歴史哲学者】からブルーノ【ジョルダノ・ブルーノは16世紀のイタリアの哲学者】へと【伝わった話

を】！ この話は音声で語られている。また記号で語られている。世界共通語で、多言語で、それぞれの人工国際補助語で、手話で、花言葉で、シェルタ語【アイルランド語やゲール語をもじった隠語】で。内縁の妻が、売春婦が、浮浪児が、パース・オライリーが、ホールの中の群衆が、それを酷評したり褒めたりするために。行儀の悪いナネッティがお疲れ気味のハリーと輝かしい日々を送っていた時から、ある種の焚き付けるとパッと火が燃え上がる泥炭がある。こう火がつくのは、そよ風が彼女のペチコートを舞い上げると同じくらい頻度だ。お茶用の陶器のポットが用意され、食べ物もあり、談笑が永遠に行われる（濃いワインが1人の哀れな男を死に至らしめる時、享乐的な生活は、ソウ、ローランの死となるのだ）。この何千年もの間ビジネスは利益優先となってきたのであり、我々混血民族は、酒やらワインやらビールやらを、またニュー・アムステルダムピーター店やら、売春婦がはびこり、ラム酒が店主の死の匂いを漂わせ、結局南アメリカの外れで死んでしまったパオリの店などを、2回あざければ3回馬鹿にするといったようなことをやってきたわけだが（たとえ死んだ者が宗教上の偽善者であっても、修道士が遣わされるであろう）、天候やら結婚、埋葬、自然淘汰について書かれたこの旧世界に属する手紙は、積み上がり、崩れ落ちながらも、我々のもとに新鮮な状態でもたらされたのであり、昔からのティーカップのように、恒常的に作成されてきた。私が酔って熱くなっていた時に。ハハ！ あなたがみすばらしいあばら屋で凍っていた時に。ホホ！ 彼女は彼女の町の話語ったのだ。フフ！

さて煙占いや靈魂注入説というのは、ともに2つのリベットのよう、しっかりと社会にはまっているものかもしれない。しかし自由気ままな状態にいる我々は、特許状を持ったあの娼婦の言動を支持しつつも、解説してみると、この代物【手紙】の全体的意味合いや、全体にわたる句の解釈や、(118)その句の中の1つ1つすべての語の意味に対しては、払拭しがたい疑念を持つかもしれない。だがその一方で、アイルランド人の日常的な独立性がどんなに足枷のないものであろうとも、原著者が誰であるかについては、およびそれが全体的に権威をもつものであることについては、いかなる根拠なき疑念も誇らしげに抱くようなことがあっては決してならない。オーモンド家の飲ん兵衛君、この点について、この事例を論争の対象としてみよう！ 突飛な人間たちの話に急ぎ戻ってみると、バッファロー・ビルが乗るような、調教されていない雄牛のような荒れた心の持ち主にとっては、表面的にはこの事柄は、1日で済んだのであれ、1年かかったものであれ、想像する他ない期間かかったものであれ、言うまでもなく最終的に済んでしまったことであり、あるところに落ち着いてしまったことであり、ある

時点で終結してしまったことなのだ。結局【こうなるまでに】どれくらいの日数や年数がかかったのかは、恵み深い恩寵を逐次与えて下さった神だけが知っていることとするべきであり、ともかく、どういうわけか、どこかで、上げ潮の前だか下げ潮の後だか分からないが、電話帳に載っているコッコラニウス氏【深紅の屠殺人の意味】あるいはガッロタウルス【雌鳥—雄牛の意味】氏が、これを書いたか、すべて書いたか、すべてを書き留めたか、どれかをしたのであり、それでおしまい、そこでピリオドなのだ。アア、疑いようもなくその通りなのだ、いや、十中八九そうなのだ。しかしながらもっと深い考え方をする者は、心の片隅で、このまさに「それでおしまい」とか「状況は今言った通り」とかといった言葉は、全くのナンセンスなものだと常に考えている。何故か。

何故ならば、心を病んだこの書き手の書いた至高の聖書に関しては（屋根窓の際で囁かれる噂話は、屋根からの大声となるであろう。壁に書かれた落書きが、主な通りを歩く人々の心に彩りを与えるのと同じくらいに確実性に乏しいが）、どんな形であれ、この呪われた七面鳥【ALP】に関わる混沌とした全世界のすべての人、場所、物事が、絶えず動き、形を変えていたからなのだ。すなわち、移動する角製インク入れ（おそらくインク壺）、書くのが遅いもの勝ちのペンと用紙、絶えず多少なりとも内部で誤解しあっている反共同制作者たちの精神などであり、また未来同様過去においても時が進むにつれて様々に語形変化し、様々に発音され、そうでなければ様々に綴られ、意味が変わりうる、また発声も変わりうる手書きの跡である。そうなのだ、どうか手助けしてくれ、プト—王【ラブレアの『第3の書、パンタグリユエル物語』の登場人物】よ、それは染み、汚れ、横棒、丸、輪、くねり、そして併置されていたものが執筆速度に拍車がかかって結びついてしまった各走り書きから成る、青紫色の無意味な夾雑物などではない。いまいまいことにそう見受けられるだけのことだ。確かに我々は、フンバエの飛び明け方というこの楽しい時間に、それを受け入れようと受け入れまいと（口を滑らして秘密を漏らしてしまった魂の漁師が言ったように、我々は自分自身を頼りとしているのだ）、結局は、次のことを我々に示してくれる、乾いたインクで紙片に書かれたものをまさに所持しているということをも有難いと思ふべきである。すなわち、我々はそれを喪失していたのであり、地球の最も隠れたところにまで持ち去られ、そのすべてが完全になくなってしまっていたということである。（119）そしてまた、もっと悪いことに、不要なゴミがわわ我が家に投棄されているのだが、しかし我々は大地に根源的な接吻を十分にしたあと、あらゆる手段を用いて、溺れる手ではがみつつかのよう、この手紙にあくまで取り組んでいく。期待はしていないものずつと以

下のことを思いながら。つまり、哲学に照らしてみれば（どうか彼女が我々を見捨てないように！）、物事は何らかの形で15分後には幾分かながらも明らかに始めらるであろう、ということである。そして、この物事はふざけた話だが、状況次第で、これからも十中八九明らかになるであろう、絶対にそうなるはずである。というのも、まさにここだけの話ではあるが、すべての物事に限界があるように、これでは十分ではないからだ。

というのも、次の諸点がこの手紙にはあるからだ。あの農場の女は生皮が放つような、悪戯好きの狐が出すような悪臭に対して悪趣味な好みを持っており（盧木【石炭紀の化石植物】のペンは、災いの中の安全性を必要とする）、それを手紙も持っている。ただこの女は、怒りのこもった輪状のムチヒモの跡【のような形の文字】を、驚嘆すべく詳細に吟味しながら使っている。その文字は非常に慎重に固定化され、ブロック化している。手紙は不完全な手跡と削除された最終部分を非常に残念な気持ちで思い出させる。約1000語から成る渦巻き状の円光であり、前書きは（アア！）今は判読できない軽やかな羽ペンの飛行で、エアウィッカーのイニシャルが、材木のように大文字となって飾られている。そのイニシャルはキリストを表すギリシャ語の初めの2字から作られた不可解な組み合わせ文字であり、三石塔【2本の立石上に1つの石を乗せた巨石記念物】の印でもある【】の形となるよう意図されたもので、最終的には彼のゆゆ優柔不断ぶり【hectancy、原文通り】にちなんで Hec と呼ばれている。この印は時計とは逆方向に回すと記号的に彼を表す文字となる。一方これよりも小さな△の印は、優美な自然の状態変化の結果として、alp あるいは delta と愛情のこもった呼ばれ方がされており、単独で表示される際は配偶者を表し、また反復的には配偶者の傍らに立っている。（とはいっても、この件に関して言えば、中国の一团—シャンチャンやホンコンやサンシェネウルー—から聞いたところによると、この雌鳥は少しの間、154と2番目の128【を使った計算。8-4と5-2と1+1か？】を求めていただけではなく、完全に、再度の2+30と20-9を、つまり我々自身が一般に使う432と1132をひたすら使うことを求めている。それ故次のようにしたらどうであろうか。前者のシグラを村の居酒屋、後者をひっくり返った橋【川に映った橋】、乗法の記号【×】を目の前の交差道路、諸君が気に入っている鉤付き棒【】は家庭用さらし絞首台、昔の4輪馬車【口】は暴れ馬のいる野原、どのようなものであれ紅茶のティー【T】はある日の逢い引き、片側がないもの【+】は、墓地の中のアイルランド人用割当地に至る袋小路の道という具合に。これでよいではないか）。すなわち恒常的な内的世界の独白者としてである。ある者はこん棒と非難し、さらに多くの者は煤煙と非難している許容範囲内の混乱状態があるが、しかしそのおかげでもなかるうが、ゆがんだ頭部を

持ったそのビーの文字は、耳の部分に尾をつけるとしばしばキューの文字と捉えられ、(120)口の部分に尾をつけるとしばしばペーの文字【ヘブライ語の第17の文字、**ק**】と捉えられる。そして前者からはプリストファー・プロンブスが、後者からはプレズビテリアンのパット【アイルランド人のこと】が生まれる。短い小器用な綿を思わせるダッシュは、整った古風な本来の手紙にはあまり適したものではない。突然痲癩を起こしてインクが跳ねて、真ん中が大文字になってしまっているものがある。乱雑な織物の迷路の中に、ある語が巧妙に隠されており、それは色のついたリボンの巣の中に、野ネズミがいるようなものだ。馬鹿馬鹿しいほどに雄牛の足跡に似たビーの文字は、我々とともにいる一般の口のきけない者よりもはるかに明確な身振り手振りで、生まれつきの紳士でいることがどんなに難しいことかを物語っている。名詞の前の代名詞の**葬儀**を見よ。彫り刻まれ、手を加えられ、端の汚れが拭かれていて、太った小男が収められ、ペミカンの詰まった鯨の卵によく似ている。その碑文は典型的な不眠症に悩む読者に、ある晩、何回も何回も、いついつまでも、頭が垂れ下がるか眩暈がするまで鼻を押し付けて読むよう言い渡している。テキスト上には、激烈な辛さを持つ香辛料が振りかけられた疑句標

【古写本中疑わしい箇所につけた印】が赤く塗られ、それらはすべて誤謬、遺漏、繰り返、非整列に不必要な注意を向けさせている。あの（おそらく局部的なまたは個人的な）様々な**蛆虫たち**【文字】、および蛆虫よりは一般に受け入れられている**陛下**【HCE】のための**蛆虫たちが存在し**、それらは些末なものに過ぎないが、人々を密かに面白がらせているであろう。見た目には傲慢な縦横に交差するギリシャ語のイーの文字が、時代遅れのものとなって、病にかかったフクロウが、鷹のように飛んでアテネに帰るかのようになり、あちこちにぎこちなく止まっている。ジージーもまた、初めのうちはイエズス会士の陰険さをうかがわせる形となっているが、後になると西の方角に向かって腹立たしげにひざまづいている。エトルリア人の雑談で使うある語句に影響を受けた、東ゴート族が書くような綴り字違い、端的に言えば、学習効果がほとんどすべての行の終わりに現れている。ギメル【ヘブライ語のアルファベットの第3の文字「ל」】をイオタ【ギリシャ語のアルファベットの第3の文字「ι」】の目に通そうとする絶え間ない取り組みによって、その頑固さ（32人の乗馬技術を持った男のうち、少なくとも11人がこの性質を持っている）が窺える。こうしたことは、例えば、全く思いがけず左に旋回をして、過去のある特別な古傷へと戻ることに至る。便器のような開放的なダブリュ（この文字は昔のぬかるんだ大地が起源である。人は一団となって、この文字をトイレに関わる品のないもの—あまりに—青い—顔をして—痛

みもあり—あるいは、ひどく困難な排尿を行うための器、要するに、倒れそうになるほどに悪臭をたてるものと悪し様に言いたいのだろう）は、固い決意を持ってどっしりと座し、我々に自然の中の最も自然なる不可避性を有するもの【排泄物】を思い起こさせる。一方イライラ、ソワソワしているエフは、生まれながらの野蛮人が使った角の生えたディガンマ【使用されなくなったギリシャ文字の1つ。元々アルファベットの第6字で半母音wを表した】であり、現在、ある異性愛者の野暮ったい唇から漏れた時（2つの厚かましい顔つきのボールド体の印刷用書体がいつも使われている。—(121)そのうちの1つはもう1つのクラウディウス朝の皇帝仲間【古代ローマの皇帝たち。ティベリウス、カリギュラ、クラウディウス、ネロの各皇帝】と同じくらい頑迷である。【このようなことを】言うために話を中断する価値はあるのだろうか—修正マークとして、このパピルス全体にわたって）以外滅多に聞くことはないのだが、紙上を慎重に歩き、**Δ**としてセンセーショナルにも、様々な言葉遣いの中でもある遣い方を追い求め、考え込んでやつれた姿となり、また菱形模様の窓のへりで落胆した様子で立ち、月桂樹の葉でできたバスク【体にぴったりの短上衣】を着、そのフォーク状のフロッグ【上着の前面につける装飾的な留め具】の周りでヒラヒラさせ、しかめ面をして歩き、あちこちでけいれんを起こし、そこいら中に空言を投げつけるが、あるいは**Δ**となって、その靴の紐を引きずりながらも、相手を触発することを途中でやめて、控えめな態度に戻っている。【以下の一文は、Cについての記述のように思われる】我らの原祖先【アダムとイブ】が口にした**言葉それ自体**（ちなみにこの言葉は、全く完全にありふれたもので、時々棕櫚の葉の形の尾を持った毒蛇とか、もっと頻度を多くして、ケインアップルと呼ばれるアルブツスの果実と花と葉、といった形となる）の前に置かれる奇妙な警告の印であり、古文書学者が**草葺き屋根の漏れ穴**とかその**帽子の穴を通して聞こえてきたアラン島の男の声き囁**【原文は *ingperwhis*】とか呼んでいるもので、後者については、次に来る語順が、アラン島の男の穴帽子囁き声彼のホーを通して（再び哀号となり、再び音の意味を生み出し始め、再び意味ある音は哀号となる）といった具合に、好き勝手なものとなりうることを示している。気位の高いねじ曲がった形のエイチは、ジェイとして歩き回るアイの大半と同様【ラテン語では i と j は置き換わる】、最も稀なるひょうきん者に簡単になるが、単語の先頭に置かれているのであれ、真ん中であれ、末尾であれ、他の文字と切り離しそこで半分は裂くと、jam 中のジーム【アラビア語アルファベットの第5字、ローマ字の j を当てる】となり、諸君、線虫のように種無し【付点なし】になる。率直ながらも気まぐれなアンダーラインの

無邪気な露出趣味。右頭部だけの色白の女性が、揺り木馬に乗っているのが見えるほどに頭のイカれた手紙の書き手の周りにいる、聖書から極めて適切にも追い出された時以来見かけるようになった、その奇妙なエグゼクティブな形の蛇【S】は、以前よりも長く続き、ますます陰険なものとなるでしょうもない傲慢さを保ちつつ、書き手の筆圧の下、我々の目の前で螺旋状にコイルを解き、トカゲのようにノロノロと膨れていくように見える。見苦しいほどに音楽家的なところがなく、自発的な音響を立体的に生み出すものとして描かれており、それはアー、ハ、**ポダトウス**【2つの上昇音符を表す、中世の記譜法の記号】同様魔術的であり、疾走するフーガの中の10声のカノンのように、オー、ホー、驚愕させるものであり騒々しいものだ。この日の日付から、年号と世紀の記述が意図的に省略されているが、それは複写した者が少なくとも抑制の美を理解したように思われるただ唯一の時である。末尾と冒頭との軽薄な結合、堂々たる文体による謹厳なる掘り下げと2番目に良い語呂合わせとの非因襲の一体化（原文改竄について：こうした美味な話は、マニユスクリプトBbのブーサーブラウス家の箇所のみ見られる。一コード4世【コーデックス、即ち、古写本のこと】、パプ2世【パピルス写本のこと】、ブレック11世【ブレックファーストのこと】、ラン3世【ランチのこと】、ディン17世【ディナーのこと】、サップ30世【サパーのこと】、フルアップ1690世【フルアップは満腹のこと】）である。注釈者は熱心なあまり、死者に対する弔いの鐘の音を、マフィン売りが鳴らす鐘の音と聞き間違えてしまっている）がここに見られる。(122)4つの短縮形のアンバーサンド【&】があり、我々は素早く過ぎ行く何年もの間、その下にある暖かく柔らかい半ズボンを一瞥することができ、自ら触れることができる【&の下部が人の腰に似ている？】。早筆の悪筆者。呼格の誤謬に始まり、対格の欠陥で終わっている。かつて読むのが大好きだった詩歌の1編を思い出しながらもそれが言えないという、英雄が感じるような苦痛を伴う失語状態が、幾多の誤謬を経て、自分自身の名前を間違えるという一般的健忘症に至っている。次にアールがある。rrrr！これらのアールはすべて好戦的で、高位聖職者のケトルドラム【一種のティンパニー。午後の茶会で用いられた】とののしり声を表すヒエログリフであり、神聖な礼拝規定に基づく、「ロームルスのために祈ろう」という美を伴う真実を求める祈りから、血染めの手によりもぎ取られたものであり、また乱暴にも運搬人が、聖堂の尖塔から、ルバイヤートの4行連らしきものにしようと、次のような人たちの間に投げ落としたものである。つまり、テンプル【居酒屋名？】にも入らないし、ローズ・ディスティラリー【居酒屋名？】が焼けてしまっただけで、ナイツ【居酒屋名？】の火があふれるような酒をがぶ飲みすることもしない、だ

けれども上下運動が好きで、サイコロの筒が振られる日には、パン、心血注いで、王立の6軒【『売春宿』で俺は過ぎ、畜生、そしてあそこではあの女が尽くしてくれるのだよ、みんな、あの女に、パン、素敵な女でね、真っ赤な服を着て、そのロブスターみたいな真っ赤な髪に至るまで赤くって、パン、神様とおマラがああ年増の赤褐色の髪の悪の女とやったのだ、待てよ、パン、神様ともう1人はあんただよ、彼奴じゃない、あのチビがもっているトランプでスポイル・ファイブ【トランプゲームの1つ】をやっている、彼奴の豚皮で出来た口をやっつけてやったんだ、彼奴のためさ、K.M.おマラめ、彼奴どこにいるのかね、という人たちである。次に（左通路の隅に来てみると）十字形の追伸文があり、そこからは3つの**接吻**【basia】、あるいはもっと短く小さくすると**キス**【oscula】という語が過剰なほどに用心深く擦り取られて、そしてそれは明らかに『ケルズの書』の陰鬱なトウクンのページを思い起こさせる（そしてこの時、バラ十字会【17、18世紀のオカルト的教義を信奉し、バラと十字架を信奉した秘密結社】への3集団の志願者たちがいるということを経験から消す必要はない。彼らは3つの投票箱に自分たちを支持する票が落とされ、自分たちの出番がやってくるのを端に置かれた円柱のパネルの中で待っている。そしてその後この集団は、誰を相手にするにも2人いれずむ、ぶら下がりの管財人になろうとバラバラになる。こうした管財人には老マシューが最初に就く。この時マシューは、まさにこの時以降と同様この時にも、言葉を口にする者は他の者と話す際、【話題となる】第3者が評判の悪い者である場合には、自分たち2人は仲間だと人に言う習慣に陥ってしまうと、特に目立った言い方で言い、そしてまたそれに続けて彼は、唇と舌を使った**情熱的接吻**【basia】は、抱擁する者が誰であれ、事情は場合場合で異なっていたかもしれないが、その者（男であれ女であれ）が本心とは裏腹の心を持ってたと書き記されていたとしても、やはり**接吻**【suavium】として読まれるであろう、とも言ったのだ。致命的に垂れ下がり小さくなっていく、呪わしい殴り書きのスロープ形状、不完全な道徳的盲目状態の確かな兆候。すべてのこの4つ足のエムのあまりに著しい過多。(123)大きな分厚いディーが、何故親愛なる神を意味するのか（何故だ、エッ、何故だ、エッ、何故だ）。型にはまったエックスと最後から2番目の文字【Y】のキザな形態。18回、24回。しかし少なくとも、モーリスよ、有難う【モーリス・ダランティエールは『ユリシーズ』の初版を印刷】、結局最後はペネロピー的忍耐を示している飾り書き【署名が偽物でないことを示すための自筆による印】と、投げ縄が跳ねている様が末尾に描かれた、732回もの筆遣いの巻尾飾り模様である—こうした素晴らしいもの全体を見ると、この互いに枝を伸ばしあっているオガム文字で書かれた、上や中へと激しく動く女の性リ

ピド一の跳ね回りが、男の拳【理性】が曲線を描く【殴ること】という不変の現実性によって、厳しく押さえ付けられたり、再び簡単に言いくるめられたりするのを、熱を込めて積極的に見ようとしないうる者がいるであろうか。

ダフ・ミュッリの書は、非常に親切な出版社のお膳立てによって（超音速の光の制御の下で、テレビ受像機に映ったセンサーショナルな彼の画像は、決して遠くはない未来までに残されることになる。音響的に価値ある製品が、1マイクロアンペアあたり1000サンチームのコストで、株式会社クロモフィロモス社から製造されるとすぐに）、引き合いに出される書となっているのであろうが、彼はこの種のアイルランド人的に楽天的な自分と協調関係にある書【ALPの手紙】を、まず第1に不運なものとか、4本の手によるものとか、4手類動物によるものとか、水切り遊びとか、モールス信号で記された困りもの（『性の音響学に基づく統合失調症研究に関わる一考察』14巻、2-555頁を見よ）とか呼んだ。それ以前には、この教授からはるか遠いところで、チュング・テュロイド（『マグルトン派【17世紀にロドウィック・マグルトンが起こしたピューリタンの一派】教義における事後の半無意識背後の欲求不満』を参照）によって著名な観察記録が出された。この記録書は、世間でこの惨めな水夫の名前（3名の耳の聞こえない異邦人に、我々は一定の形の羽根の刺さった帽子を脱ぐ）と結びついている、あまり知られていないベストセラーの周航記、カルタゴ海軍の報告書『ジェイソンの巡行の流れに沿ったマクファーレンの大洋から』について記しており、それによるとこの書は【手紙から】うまく180度書き換えられ、あらゆる小話と娯楽に富んだ12の章からなるベデカー出版の本として、大胆にも再販されたのであり、諸君の頭の悪い仲間と同じくらい容易に騙せる、頭のスカスカな私の仲間を揺り動かし満足させることができるものなのだ。

ティベリア【イスラエルのユダヤ教の聖地である都市】にある重層型アパートの住民の紛うことなき正体は、最も常道はずれたやり方で明るみに出た。元々の文書は、持つ者が持たざる者が分からぬ者の、最も読むのに堪え難い手書き文書の中にあつた。つまり、そこにはいかなる種類の句読点の印が見られなかったのだ。しかしその左ページを蠟燭にかざしてみると、このモーゼの新しい書は、我々の世界の最も古い光が放つ沈黙の問いかけに最も顕著に答えるのであつた。(124)そして右ページを見ると、この書には尖った道具で数々の刺し傷や葉状の裂け目をつけられているが、突き傷となっているだけで、穴があいている訳ではない（大学関係者が使う言葉の意味で）、という刺激的な事実が分かつた。これらの手紙の傷は4つのタイプに分けられ、やめてくれ、

どうかやめてくれ、どうかどうかやめてくれ、アア、どうか1つ1つ頼むからやめてくれ、というつもりでつけられたと次第に理解され、その理解は適切であつた。少しばかりの砕けたガラスと割れた陶磁器の破片が目立っている、一度始めたらやめられない者たちの入っている収容施設の、そのアーチ型の壁をたった1つの手がかりとしてたどっていくと、一ロンドン警視庁の調査が指摘したことだが→、これらの傷は、威厳に満ちたある教授が使ったフォーク A により、彼の朝一食の一テーブルで、「刺激」を受けたのではないか。つまり、彼は職業上大変な怒りを持って、その紙面に穴！を開ける（原文ママ）ことで、{平面上に（？）表面’ ’上に}、=時間の観念を導入するに至ったのだろうか。性格から言っても、立場から言っても、極めて謹直な人物であるし、ティーやらバター付きパンやらハムやら生まれたての卵やらに、和やかな気分でありついていたので、コックスパー・コモン【闘鶏場の名前？】で少なくとも1週間に1回、恥入ることなく、彼にとって非常に大切な人として、母親にも匹敵する人として、彼が心から崇めていた人物の古からの生命原理に対するこうした怒りが、愚かにも、彼、ブレンダーゲスト教授の心を襲うことなどあり得なかったのではないかと思われたのも当然のことであつた。そして既婚夫人が平易に感じる英語は、多くの人々を的外れな方向に誤誘導するものであつたが、しかし筆記文字が明晰である箇所、用語が簡潔である箇所では、必ずや4つ葉のシャムロックと4つの突き傷が、他の箇所よりも繰り返して現れていること、そうした2箇所は、雌鶏夫人がゴミの山の上で自分の穴あけ装置【嘴】用に自然に選んだのと全く同じ箇所であることを、男であれ女であれ、物事を注意深く観察する一部の人間ならば気づいたのであり、そうした時、草原とポテトの国、水の溢れるアイルランドでのみ育った思索家たちは皆、またいたずら好きな鶏も、音楽のソルミゼーションにおいて、いかなる場合でもユの音ではなく、ミの音を出していた者も、はっきりとした結論を出し、ミツバチが大群を作って蜜を追い求めている中、羞恥のため息を吐き（アア、ケチ臭くもきれいな紅よ！）、謙虚な口を開いたのであつた。それならそれで仕方がない、それが現状だったのだ、と。フィン・マクールの偉業である手紙の作成は、彼が部下たちとリーシュ州にいた時になされた。我々がたちまちのうちに熱狂したのを認識して、彼は何年間も大層喜んでいて。後書きについては、戦利品を見よ。とは言っても、それはまだあの船員が酒をすすっていない時のことであり、あの狩人がグラス一杯に泡を立てていない時のことであつた。そして狐とガチョウが「父アダムの居酒屋」の周りで、平穏な時を送っていた頃のことであつた。

老いたエルサレムよ、老いたローマよ、老いたエフェ

ソスよ、老いたアンティオキアよ、老いたアレキサンドリアよ【4博士とロバ】、(125)今後彼は嘲りの声の中で駆け出すのかとか、混乱に巻き込まれるのかとか、身ぐるみ剥がされ、昼間から酔っ払っている人物の息子が彼のすべてなのか、とかの問いかけを、R. Q. にやって来る週末旅行者にする必要はない。とはいっても、無知のまま何一つ持たずに、彼の父親が接していた大海のように広い人間社会の中に出された息子の中の息子トゥルコ・マクフリー【シェム】について、我々は何一つ聞いていなかった。そして彼、つまりこの息子はずっとこのような境遇にいたが、その日朝が去った後の別の時間帯に、親愛なる仲間の馬具係として詩篇を書き【ALPの手紙の代筆】、ダイヤモンド【ひどい不機嫌、の意味】というのがその詩篇を書いている者の名前であり、欲望から別の同じような欲望へと次々に移っていく。娘たち、トルバ【フィンの父親の妻の1人】のかなり横柄な美しい娘たちは、彼を探しに行ってしまう。イギリス軍から軍の古参の者たちに仕えるように求められている。以前別の者と間違えられた。可愛く楽しげな表情をし、おそらく髭を生やしていると、諸君は言っただろうか。傾斜の急な梯子がある労働者階級向けのビリヤードホールを使っていると、諸君は言っただろうか。運び屋のハンス【郵便配達人ショーン】ではないが、とはいっても、ほんのちょっとしか笑わなかったし、普通の者より少しばかり厚かましくなかった。そして迫害の球が投げられることをそんなに心配しなければ、ソウ、彼は敬慕に値する楽しげな表情を保つことができるであろうし、そうするであろう。まさにそれが真実なのだ。はっきり言おう、ゴシップ屋のジョゼフではない！ そうではないのだ！ 皆が大いに安堵することには、訳の分からぬことをベチャクチャ喋る顎を持った無骨な男【HCE】についての憶測に基づいた話は、鼻に傷がつくほどにシャワーのように栗のイガが投げられている中、熱しながらも消えてしまった。そして彼が占めていた場所は、あの憎らしい、未だ男性としての評価が今日今一つよくない、メモ用紙のかっぱらい、(クソッ、馬鹿野郎、畜生、忌々しい、下らない、恥を知れ、馬鹿馬鹿しい、言うも愚かだ、死んじまえ)、ペンマン・シェムが占めるのだ。

(注)

『フィネガンズ・ウェイク』の原典は、James Joyce, *Finnegans Wake* (New York: Viking Press, 1947)を使用した。本文中の()内の数字は、*Finnegans Wake*の原典のページを表す。【 】内の日本語は、該当箇所の内容を筆者なりに解説したものである。()内の日本語は、原典の()内を訳したものである。太文字の箇所は、書名と曲名を除いた原典のイタリック体の箇所である。{}は、原典の【】を表す。

参考文献

- 1) Anderson, John P. *Joyce's Finnegans Wake: The Curse of Kabbalah*. vol. 1. Boca Raton: Universal Publishers, 2013.
- 2) Campbell, Joseph, and Henry Morton Robinson. *A Skeleton Key to Finnegans Wake*. rpt. New York: Viking Press, 1944.
- 3) Glasheen, Adaline. *A Third Census of Finnegans Wake*. Evanston: Northwestern University Press, 1963.
- 4) McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Revised ed. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1991.
- 5) Mink, Louis O. *A Finnegans Wake Gazetteer*. Bloomington and London: Indiana University Press, 1978.
- 6) Rose, Danis, and John O'Hanlon. *Understanding Finnegans Wake: A Guide to the Narrative of James Joyce's Masterpiece*. New York: Garland Publishing, 1982.
- 7) Slepion, Raphael, ed. *Fleet Search Engine in The Finnegans Wake. Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.
- 8) *Glosses of Finnegans Wake in The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET)*, Website.
- 9) 宮田恭子訳、『抄訳、フィネガンズ・ウェイク』集英社、2004年
- 10) 柳瀬尚紀訳、『フィネガンズ・ウェイク』I、II、III、IV、河出書房新社、1991年

ジェイムズ・ジョイス『フィネガンズ・ウェイク』
第1部第5章の概要
(104.1~125.23)

大島由紀夫*

(*東京海洋大学名誉教授)

要旨： ジェイムズ・ジョイス著『フィネガンズ・ウェイク』の第1部第5章104ページの1行目から125ページの23行目までを訳出した。逐語的に訳した箇所もあるが、内容をくみとりながらその主意を表した箇所もあり、「概要」といった題名にした。この第5章では、ALPの手紙が主に扱われている。すなわち、如何にその手紙が見つかったか、その様相、その読み方、その内容、そこに扱われている愛の問題をどう考えればよいのか、その中の文字、句読点、記号がどのような様相を持ち、どのような意味を持っているのか、それがどのように評価されているか、といったことである。

キーワード： フィネガンズ・ウェイク、第1部第5章、概要